様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２１９３７

研究課題名（和文）江戸時代における医学の発展が美術表現に与えた影響の研究

研究課題名（英文）A Study on the Influence of the Development of Anatomy on Artistic Expression During the Edo Period

研究代表者
山田　麻里亜（Yamada, Maria）

早稲田大学・會津八一記念博物館・その他（招聘研究員）

研究者番号：６０８８４０３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：まず、解剖図・解剖書およびそれを制作した画家について整理作業を進め、そのデータをもとに、該当する作品資料の調査を実施した。その結果、それらが医師たちの手によって繰り返し写され、学術的な書籍・図版として流布していく過程を考察することができた。また、表現技法の点から、円山派の画家および銅版画家が解剖図・解剖書制作に重用されたことを明らかにすることができた。
また、18～19世紀における解剖学的関心の高まりと、同時代の骸骨図の解剖学的正確性の向上に関して、解剖図・解剖書と骸骨図の比較検討を行った。その結果、19世紀以降に盛んになった整骨や木骨制作が作画に活かされた可能性を検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
医学の発展は、私たちの生活に深く関わる問題である。現代よりも技術や情報が大きく制限された江戸時代の日本において、医者たちがどのように医学を発展させてきたのか、そしてその過程に画家を含めた様々な人々がどのように関わっていたのかを取り上げた本研究は、現代人が日々のなかで当たり前のように享受している医学の発展に対して、改めてその重要性を認識する機会になるだろう。過去の医者たちと、それを支えた人々の弛まない努力と成果によって、現代の私たちの生活があることを意識し、今後の医学の発展に貢献できることを期待したい。

研究成果の概要（英文）：First, this study proceeded with the organizational work on anatomical drawings, anatomical books, and the artists who painted them, and based on this data, a survey of them was conducted. As a result, this study examined the process by which they were repeatedly copied by physicians and disseminated as academic books and illustrations. In terms of expressive techniques, this study also revealed that the Maruyama School painters and copperplate painters were heavily employed in the production of anatomical drawings and anatomical books.
In addition, a comparative study of anatomical drawings and anatomical books and skeletal drawings was conducted regarding the growing anatomical interest in the 18th and 19th centuries and the increasing anatomical accuracy of skeletal drawings of the same period. As a result, this study examined the possibility that osteopathy and the production of wooden skeletal models, which flourished after the 19th century, were utilized in the drawing process.

研究分野：美術史学

キーワード：美術史学　解剖学　解剖図　骸骨　円山派　銅版画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまでの医学と美術の関係についての研究では、その関係性を日本や西洋を含めた広域的観点から捉える傾向があった。また、日本美術史において医学との関わりが部分的に論じられることはあったが、それらは個々の作品の考察に留まっていた。

そこで本研究では、西洋から様々な知識や書物が流入した江戸時代を中心に、医学書や解剖図について美術史学の視点から考察を行うことを目的とした。画家たちがいつ人体や骨格の構造について知る機会を得て、それをどのように作画に活かしたのかということをテーマに、研究への取り組みを開始した。

２．研究の目的

本研究は、江戸時代における医学の発展と同時代の美術の関係性に注目し、医学の進歩が美術作品の制作に如何なる影響を与えたのかという点について、下記のテーマを設けて研究に取り組んだ。

（１）これまでの医学と美術の関係についての研究では、美術史において画家の解剖学的理解の程度が個別に検討されることはあっても、それを同時代の医学の情勢と結び付けて考察された機会は少なかった。本研究は主に医学史において研究対象とされてきた医学書や解剖図の出版・制作に円山四条派の画家や小田野直武などの有名画家が関与していることに注目し、美術史学の視点からこれら資料の位置付けを検討する。

（２）江戸時代には多数の骸骨図が描かれたが、その多くは解剖学的な検証が未だなされていなかった。本研究では骸骨図を取り上げることにより、江戸時代の画家の人体構造への理解の程度を解剖学的に検証する。

３．研究の方法

以下の２点の課題に取り組むことにより研究を進めた。

（１）医学書・解剖図の制作に関わった画家の整理

医学書や解剖図には人体の構造を図示する挿絵や、腑分けの様を写実的に描写した図が付されることが多い。こうした絵図は医者本人が描く場合と画家が描く場合とがある。画家が作画を担当した例には、西洋から流入した書物を手本に描かれたものや、実際に画家が医者とともに腑分けの現場に立ち会い、スケッチを行った上で描いたものとがある。前者には『解体新書』（安永 3 年・1774）の挿絵を描いた小田野直武、蘭方医・宇田川玄真による『医範提綱内象銅版図』（文化 5 年・1808）の挿絵を担当した亜欧堂田善などが挙げられる。また、後者には吉村蘭洲、吉村孝敬、木下応受ら円山四条派の画家たちが、蘭方医・小石元俊の指導のもと『平次郎臓図』（天明 3 年・1783）、『施薬院男体臓図』（寛政 11 年・1799）を描いている例などが挙げられる。この他の作例についても、18 世紀中頃～19 世紀中頃の約 100 年間のケースを中心に整理作業を進める。こうした資料の調査研究を通じて、画家が医学書や解剖図の制作に携わった事例を個別に考察することにより、医学と美術がどのような関わりを持っていたか、その実態を具体的に明らかにする。

（２）骸骨図の解剖学的正確性の検証

江戸時代に医学界が人間の身体について理解を深めるにつれて、美術作品に描かれる人体・骨格もより正確に表現されるようになった。本研究ではそうした美術界の動向について、この時代の骸骨図を当時と現代両方の医学書・解剖図と比較することにより、その解剖学的正確性の検証を行う。骸骨図は、人物図よりも作品数が少なく、検証を行うに適度な数であると同時に、表現が画家個人の力量に左右されやすい人物図に比べ、解剖学的理解の程度が明確にできる。骸骨図と当時の医学書・解剖図を比較することにより、画家がどの程度それらを作画の参考としていたのかを明らかにしたい。また現代の医学書・解剖図との比較により、骨格が正確に描かれるようになる過程を年代ごとに検証する。

なお、以上の調査研究は、資料所蔵者・著作権・解剖の対象となった人物への配慮を十分に行った上で実施した。また、新型コロナウイルスの感染状況を考慮して、書籍やインターネットで公開されている資料を活用するとともに、感染拡大の影響に十分配慮しながら関係各所への調査研究を計画・遂行した。

４．研究成果

本研究はこれまで主に医学史において研究対象とされてきた、江戸時代に制作された解剖図・解剖書、及びそれらを描いた画家について美術史学的に考察することを研究の目的とするもの

である。

まず、解剖図・解剖書およびそれを制作した画家について整理作業を進めた。そのデータをもとに、該当する作品資料の調査を遂行することができた。特に青木夙夜、竹井立輔、菅原誠意、熊谷儀克、小田野直武、吉村蘭洲、村上大進、槇野周蔵、中井藍江、木下応受、亜欧堂田善、中伊三郎らによって制作された解剖図・解剖書について、美術史学的な観点から詳細な検討を行った。その結果、画家によって制作された解剖図・解剖書が、医師たちの手によって繰り返し写され、学術的な書籍・図版として流布していく過程を考察することができた。また、表現技法の点から、円山派の画家および銅版画家が解剖図・解剖書制作に重用されたことを明らかにすることができた。

また、18～19 世紀の間における解剖学的関心の高まりと、そこから生じたと考えられる同時代の骸骨図における解剖学的正確性の向上に関して、解剖図・解剖書と骸骨図の比較検討を行った。本研究においては、解剖図・解剖書を制作した画家が、その経験を骸骨図などの人体を描いた作品の制作に具体的に活用した作例を確認することはできなかった。しかし解剖図・解剖書以外に、19 世紀以降に盛んになった整骨や木骨制作が作画に活かされた可能性を検討することができた。

解剖図・解剖書が同時代の骸骨図などの人体表現に与えた影響については、今後もさらなる検証が必要であり、引き続き研究を継続していく所存である。一方で、医学史資料を美術史学の観点から考察するという当初掲げた目標については、一定の成果を挙げられたものと考える。

以上の研究成果の詳細は、山田麻里亜「江戸時代における解剖学隆盛と解剖図について」(『美術史研究』第 60 冊　早稲田大学美術史学会　2022 年）において学術論文として発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山田麻里亜	４．巻 60
２．論文標題 江戸時代における解剖学隆盛と解剖図について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 美術史研究	６．最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

早稲田大学研究者データベース https://w-rdb.waseda.jp/html/100002191_ja.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関